

漢詩を味わう

第160回

烏夜啼うやてい

李煜りいく

無言獨上西樓。

月如鉤。

寂寞梧桐深院 鎖清秋。

剪不斷。

理還亂。

是離愁。

別是一般滋味 在心頭。

言葉も無く独り西樓に上れば

月は鉤の如し

寂寞たり梧桐しげる深き院の 清秋を鎖せる

たち剪りて断たれず

理のえて還た乱れるは

是れぞ離れの愁い

別に是一般の滋味の 心頭に在り

言葉もなくだだひとり西の高殿に上れば、

三日月はほっそりと鉤のごとく、

あおぎりの木立のしげる奥深い庭は、

清らかな秋の気配をとざしている、この寂寞。

断ち切りて断たれず、整えてもまた乱れてしまうのは、これぞ別れの愁い。

さりながら別に言うにいわれない深い味わいが、胸の中にわき起こる。

《深院》前庭と異なり奥庭を言う。

《鎖清秋》秋のさびしさをおさえとどめてある意。

《滋味》深い味わい。あるいは濃厚な味わい。

《心頭》頭は接尾語。二字で「こころ」のこと。

※脚字の韻について ○は平韻 ●は仄韻

三百年にわたる歴史を誇る唐が九〇七年に滅んでから、九六〇年に宋の太祖が即位するまでの約半世紀は「五代十国」と称されます。長安や洛陽を中心とする、いわゆる中原に後梁・後唐・後晋・後漢・後周という五つの王朝と、長江流域より南の地方政権のなかで有力な十国が勢力を争った時代です。

李煜は、この十国の一つにかぞえられる南唐の最後の君主です。字を重光といい、九三七年の南唐建国の年に生まれ、二代目の亡父李璟の跡を継いで南唐の国王となり、南唐李後主と呼ばれます。

金陵（南京）がある支配地江南地方は、揚州を中心に唐代から経済的に繁栄し、李煜の在位十四年間の宮廷生活は、贅の限りを尽くして豪華をきわめたものだったと伝えられます。南唐は戦争を避けて国力の保全を図りましたが、北の後周の侵略を受けてかつて広大な領土を割譲するという屈辱的な講和を余儀なくされて次第に国勢は衰えていきました。在位十四年にして宋の侵略を受け、都の金陵を攻め落とされ、宋の都だった汴京（開封）に幽閉され、九七八年に毒を盛られて四十二歳で亡くなっています。

李煜は学問を好み、書画音楽などあらゆる芸能に通じた風流天子でした。古今の書画のコレクションは膨大な数といわれ、また李煜の作らせた文房四宝は高級品として珍重され、とくに澄心堂紙や李廷珪墨は最高級品です。今月の「烏夜啼」は「相見歡」とも呼ばれ、詩ではなく詞と呼ばれる韻文学の一つで「詩餘」とも言われ、長句と短句が入り混じっています。その起こりは中唐ともいわれ、宴会などで歌われた歌曲の歌詞が始まりです。五代十国から宋にかけて盛んに作られ、李煜は詞の大成者として知られています。とくに汴京に幽閉された後の李煜詞は、洗練された中に凄絶なひびきが籠っていて、人の心に訴えかける名詞として有名です。

この詞は長短の句をまじえて独特の風趣があります。「西樓」の西は太陽が沈む方向で、また秋の季節を表わして凋落を感じさせます。「月は鉤の如く」は明るい満月の夜とは違い、真つ暗なイメージです。「梧桐」は大きな葉を一枚一枚散らせるといわれ、凋落の秋を象徴する木です。

さらに投げ出すように置かれた三字の短句が際立っています。「剪不斷（きれともきれず）」と「理還乱（ととのえてもみだれ）」の「断」「乱」は絶望的な厳しい韻の響きがあり、「是離愁（これぞわかれの愁い）」「愁」にはあきらめの嘆息に似ています。そして詞のリズムである韻の踏み方が特殊で綿密な構成を持ち、悲劇の皇帝の絶望の気持ちをそのまま表現して、尽きない余響があります。

参考文献・漢詩選十五「歴代名詞選」（集英社）・中国の歴史（講談社文庫）

試みに東林に向かつて望めば 方に知る節候の殊なるを 乱声千葉下 寒影一巢孤なり 秋天の雁を蔽わず 夜月の鳥を驚飛せしむ
霜風と春日と 幾度か 榮枯を遣る

試向東林望方知節候殊亂聲千葉下
寒影一巢孤不蔽秋天雁驚飛夜月鳥
霜風與春日幾度遣榮枯 姚倫詩 多雲書

《大意》ふと東の林の方を眺めてみると、いましもすでに時候が変わってしまったことをさとする。数知れぬ木の葉は、ざわめきとともに散り尽くし、ぼつつりと鳥の巢がひとつ、寒々とした影をとどめている。秋空の雁を蔽ってやらず、鳥は月の光に目覚めて飛び立つ、霜を帯びた秋風に和やかな春の日に、いくたび繁栄と揺落を過ごしたのか。(姚倫詩・秋林に感ず)

先を争う吾事に非ず 静かに照らす求むるを忘るるに在り

爭先非吾事 多先非吾事
静照在忘求 静照在忘求

多雲書

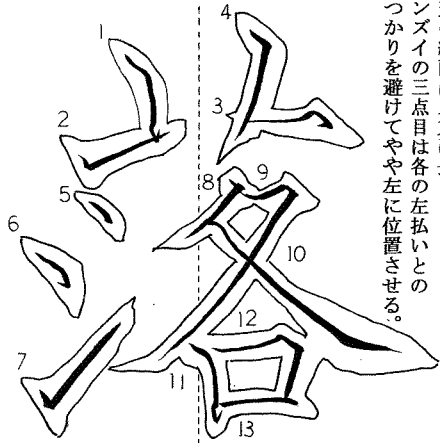
《大意》先を争うことは吾が事ではない。静かに照らして求める所を忘れることが吾が事である。(王羲之)

読み 落日 山水好し (落日に映える山水のたたずまいは美しく)

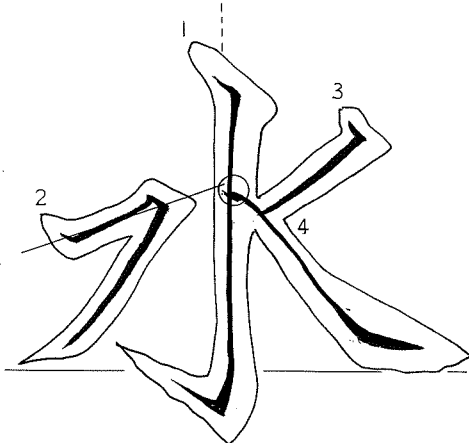
水 落
好 日
山

佐藤象雲書

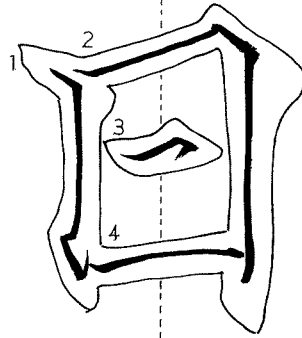
草冠の縦画は上方に長く。
サンズイの三点目は各の左払いとの
ぶつかりを避けてやや左に位置させる。



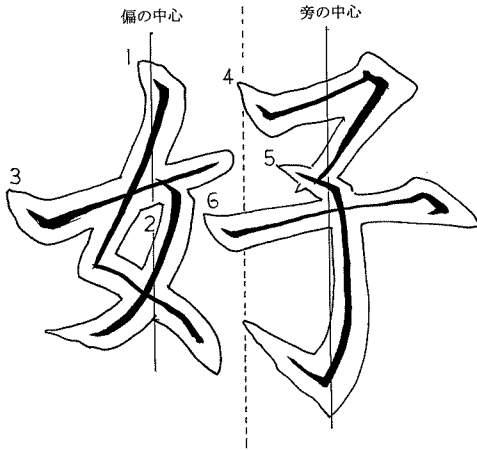
右払いを起筆位置は第二画横画の延長線上となる。



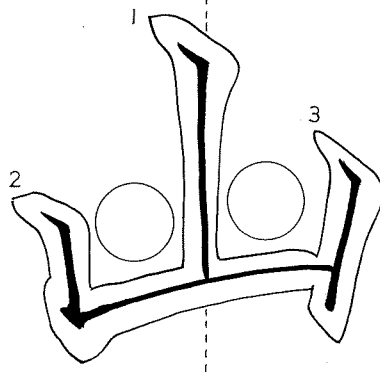
概形を小さく肉太に。



偏が旁に寄り添うように。



左右の縦画を対向させてバランスよく。



- 一般部規定課題出品について
- 規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
- 初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
- 規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩

「藍田山の石門精舎」

(前半)

落日山水好

落日 山水好し

漾舟信歸風

舟を漾わして 歸風に信す

玩奇不覺遠

奇を玩んで遠きを覺えず

因以緣源窮

因りて以て源を縁ねて窮む

遙愛雲木秀

遙かに雲木の秀でたるを愛し

初疑路不同

初めは路の同じからざるかと疑う

安知清流轉

安んぞ知らん 清流轉じて

偶與前山通

偶々前山と通ずるを

捨舟理輕策

舟を捨てて輕策を理む

果然愜所適

果然として適する所に愜う

老僧四五人

老僧 四五人

逍遙蔭松柏

逍遙して松柏に蔭う

(後半に続く)

草書

行書

※成家・師範の随意作品出品は一点までです。

水好 落日山

水好 落日山

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

次号課題

隸書

歸風 漾舟信

水好 落日山

ただよ 舟を漾わせて 帰風に信す

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支部		順位		氏名	
<p>返り花満ちてあはれや</p>					
<p>山崎</p>					

水原 秋桜子

和泉 溪石 先生書

具膳 食 飯 適 口 充 腸

具膳 食 飯 適 口 充 腸

具膳 食 飯 適 口 充 腸

佐藤 象雲 書

音

グゼンサンハン
テキコウジュウチヨウ

略解

食事の時は膳を備え礼儀正しく行うべきである
口に適ったもので満腹の時は美食の必要はない。

達益域 為充



達する (所) 益域、充と為る。……

象雲臨

■石門頌 (後漢・西暦二四八年) の臨書 (4)

『達益域為充』

石門頌は後漢時代の褒斜道開通に際して刻された摩崖碑です。

西安がある陝西省と成都が属する四川省との往来には、標高三千メートルに及ぶ険しい秦嶺山脈を越えなければなりません。

西安から四川に至るルートは秦時代から開発されたことですが、漢代になると主要幹線路として三本の道が開かれます。その一つが石門頌の述べている褒斜道です。前漢の武帝時代に一度開通していましたが、異民族の西羌の侵略を防ぐために廢道となり、西暦一二五年に、司隸校尉の楊孟文の上奏によって皇帝の裁可が下され再び開通しました。石門頌はこの楊孟文の功績を讃えた頌徳碑です。

「益域、充と為る。」は褒斜道の開通により、益州の地が交通の要となるという意味です。益州は漢代の州名で、唐代には成都府と呼ばれましたが、現在の四川省とほぼ同じ地域です。

今回の五字のなかで「域」と「為」は注意が必要な結体です。「地」の土偏のように右側に点を打つ結体は多く見られますが、「域」の土偏の中央部のカギ状の線がある碑は見つからず、敢えて挙げられるのは、秦廣武軍口産碑の一碑です。また「為」の斜め月の下に縦線があり一画多くあります。

舉威靈

いれい
あ
威靈を挙げて……

雲 舉 威

象 雲 臨

■王羲之・集字聖教序(唐・西暦六七二年)の臨書 (18)

『舉威靈』

漢和辞典によれば『威靈』とは、「不思議な威光。威勢のある神靈。」とあります。また『舉』は與と手を組み合わせた字です。與は象牙のような貴重な物を四本の手で捧げて運ぶ形(白川静著・常用字解)で、それにさらに手を加えて與を高く持ち上げるのが『舉』ということでした。前回の「弘く万品を済い……」からの続きで、解説本では「仏道は広くありとあらゆるものを救済し、尊い威光を上限りなくかけ、神妙なる力を下に限りなく及ぼす。」と解釈しています。

この三文字は直線を主体とした骨格のしっかりした行書体で、均整がとれ集字の弱点をカバーしています。テキストによっては拓の印影の違いにより柔らかく見えるものもありますが、掲載のものは各字直立して強い印象があります。これをどのように臨書するかは各人の見方です。一般的にはゆつくり運筆すると線が重くなり、速く運ぶ軽くなり、重厚な字と感ずるか、行書の軽快さをとるか。運筆の緩急を意識しながら臨書して、拓にはない墨気を表現してみてください。